

バーチャル咬合器を使いこなすための3つの要点

高瀬 直

「バーチャル咬合器って使えないよね」

しばしば耳にするフレーズである。

実際、バーチャル咬合器はまだまだ発展途上であるとの見方が強い。

しかし、その認識は些か誤りである。

意外と周知されていない“バーチャル咬合器のシステム的な欠陥”を補正し、最低限の咬合理論を学べば、バーチャル咬合器は明日からでも臨床応用可能な素晴らしいツールとなる。

口腔内スキャナーを併用したフルデジタル技工においては、クラウン設計時に模型が存在しない場合が多い。

したがって、顎運動再現の為にはバーチャル咬合器の活用が必須となる。

そこで今回はバーチャル咬合器を主題に「明日から使える咬合理論」をサブテーマとし、その使用方法並びに臨床応用を紹介したい。

歯科技工業界の展望とデジタル技工の近未来
～温故知新の心を忘れずに！～

片岡 均

日本では2021年、高齢者（65歳以上）の人口（3,640万人）は、総人口（12,552万人）の約29.1%で過去最高になりました。老年人口指数は今後も上昇を続け、2025年には生産年齢人口（15～64歳人口）のほぼ2人で1人の高齢者を支えることになると見込まれています。増大する高齢者の欠損補綴を補う歯科技工士の仕事では、歯科技工士としての志をしっかりと持った上で、インプラント技工やデンチャー技工を十分熟知することが益々重要になってきています。

歯科技工士にとって補綴装置を製作すること、それは日々技術を研鑽し努力することです。そして、勿論それが我々歯科技工士の使命でもあります。

歯科技工士は、咀嚼、嚥下、発音の機能回復、咬合、審美、そして周囲組織との調和、補綴装置の永続性などを考慮しながら患者様の健康と幸福のために歯科技工に携わることが最も大切なことだと考えます。歯科技工士が「物事の本質」を理解できていなかったら、どんなにCAD/CAM機器等が進歩したところで、それを扱う歯科技工士の学術的な知識と技術がなければうまくいきません。機械がうまいのではなくそれを扱う歯科技工士がしっかりと本質をとらえて初めてうまくいくのです。

国は「働き方改革」を進める中、歯科技工士の労働環境の改善は一向に前進していないのが現実であります。しかし、歯科技工士がゆとりある歯科技工ライフをおくることができれば、患者様目線で考えることのできる歯科医療現場になるのではないのでしょうか？そこではじめて患者様からの信頼が得られるのだと思います。そのことを踏まえたくて、今後の歯科技工業界の在り方を皆さまと共に考えたいと思います。是非お付き合い下さい。